



○補色

ほとんどすべての人が中学生までに習ったことがあるはずの言葉です。しかしこの言葉が何のことを意味しているのか忘れてしまっている人の方が多いことでしょう。美術の時間、色彩についての学習をするときに出てくるものです。

右に示した環は色彩を整理したものです。「補色」という言葉はこの環の向かい側にある色どうしのことを示しています。補色どうしの色を並べたりするとお互いが引き立て合ってはでな配色になります。自然界にも例があります。緑の葉っぱの中に咲いている赤い花などがそうです。虫に見つけてもらいやすくなっているのでしょうか？もっとも虫が人間と同じように色を判別しているかどうかは私にはよく分かりませんが。



補色のことを授業で説明するとき、私は一つの実験をしていました。

緑・赤・黄・青の色カードを使います。白い壁などにそのカードを貼り、「できるだけ瞬きをしないで見つめよう。しばらくしてこのカードを取り除くけれども、そのまま同じところを見ていたら何かが見えてくるよ。」と生徒に投げかけます。このたよりを読んでいる方の中には「あのことだな。」と理解された方もいらっしゃるでしょう。

自分が中学生のころ、月曜日の全校朝礼がありました。そこでは必ず校長先生たちの長いお話(失礼!)がありました。お話を聴きながら私はときどき校長先生の後ろにある日の丸の旗を眺めたりすることがありました。しばらくたったそのとき“赤い丸”から“緑の太陽”がにじみ出てくるのを発見しました。人間の目は鮮やかな色を見ているとその激しさを中和するために補色の色を脳の中に作り出すのでしょうか？まぶしい太陽を見た後、暗い部分に目を移したとき薄水色のような“丸”を見つけることをほとんどの人は経験していると思います。

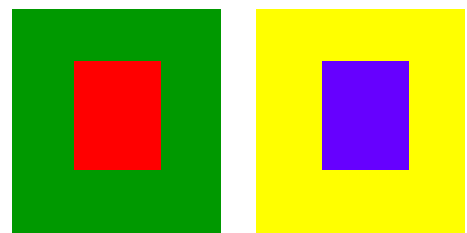
授業での実験では多くの生徒から歓声があがります。色彩の不思議さを感じた場面ですね。美術教師としてはうれしい瞬間ですが、気をつけることもありました。色の識別が困難な人も何人かはいるはずだからです。30 数人の中できょとんとしている生徒も 2~3 人は必ず存在します。みんなの歓声の中で自分だけが取り残された感じでしょうか。実際に識別できにくい子なのか単純に要領が悪いただけなのかということはその場では判断できませんが、いつもフォローはしていました。

かつては学校で色覚検査をしていましたが、今は実施していないところがほとんどだと思います。分からないまま生活している人もいらっしゃるでしょう。船に乗る人は知っておかなければなりませんね。船同士が夜間の航行中に衝突しないための目印信号は赤と緑です。

余談です。私の叔父は柿が熟れているかいないかが分からない(色の識別ができない)人でしたが車の運転はしていました。「信号の赤と緑は分からないが位置で分かってたよ。」ということでした。亡くなつてずいぶんになりますが、安全運転だったことを覚えています。

※本文の色の名称は正式なものではありません。また色相環などは私が画面上で手作りしたので色みは正確ではありません。ご了承ください。

また、色はHPでご覧ください。



補色対比